**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６７回　（２０２０年９月１３日）**

**・第６７回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３９～４０頁**

**（前回読んだ場所）📖『福音』３９頁下段　１１行目**

*私がと呼んで近づくのはである、とラーム・プラサードは言う。*

*だが私はここ市場の中で、この秘密をぶちまけなければならないか。*

*私が与えたヒントによって、おお心よ、その存在がなんであるか、察するがよい！*

**（解説）**

**ブラフマンと母なる神は一緒**

前回に続き、ブラフマンとカーリー（母なる神）は一緒、という説明をします。

歌詞にははっきり書いてありませんが、「母」と「ブラフマン」は一緒であるとラーム・プラサード［＊歌の作者］は言っています。彼が歌の中で「マー、マー」と言っているのは、その母への呼びかけです。マーはベンガル語で母という意味で、サンスクリット語のmatri（マーットゥリ）［＊mata（マータ）、mātrka（マートリッカ）とも］からきています。

**（前回読んだ場所）📖『福音』３９頁下段　後ろから４行目**

*ラーム・プラサードは心に向かって、神の性質を推察することだけを求めています。彼は心に、ヴェーダの中でブラフマンと呼ばれているものを自分は母と呼びかけているのだ、そのことを理解せよ、と求めています。属性を持たない彼が、同時に属性を持っているのです。ブラフマンである彼が、同時にシャクティなのです。無活動なものとして考えられたとき、彼はブラフマンと呼ばれ、創造者、維持者、および破壊者として考えられたとき、彼は本源エネルギー、つまりカーリーと呼ばれるのです。*

**（解説）**

**多面的な神の姿**

普通、「母」という言葉から、姿・形・性質のある「お母さん」は想像できますが、ブラフマンのイメージはわきません。ブラフマンは形も性質もない純粋な意識だからです。ではなぜ「母とブラフマンは一緒」と言っているのでしょうか？　これを理解するには神の多面的な姿の理解が必要です。

【神の姿】

①形も性質もない姿（＝ニラーカーラnirakara・ニルグナnirguna）

すなわち純粋な意識、シュッダ・ブラフマン（Shuddha Brahman）です。shuddhaは純粋、つまり、「性質も形もない」という意味です。①を英語ではAbsolute Supreme Reality；日本語では絶対の真理、最高の霊などと訳します。

②形はないが性質がある姿（＝ニラーカーラ・サグナsaguna）

バガヴァーン[＊偉大な６つものを持つ存在]とも言われるその存在は、「宇宙を創造する・維持する・破壊する」などの性質を持ちます。それは①の意識ではおこなえません（①は無活動だから）が、意識に性質が加わった②の姿で初めて、働き（宇宙の創造など）が可能となります。キリスト教やユダヤ教の神のアイディアは②です。

③形も性質もある姿（サカーラsakara・サグナ）

カーリー女神、シヴァ神、ドゥルガー女神、弁天様など、形と性質を持った様々な神々。

［＊以上の３つの他に、化身としての姿がある］

**神と自分の関係を人間関係に重ね合わせる霊的実践**

今、神を、①の純粋意識ではなく、②の姿、宇宙を創り維持して破壊する姿でイメージしてください。

キリスト教ではその神を「父」（Father）と言い──キリスト教は母マリアへの信仰もありますが、メインは父としての神への信仰です──インドでは「母」と言います。これは霊的実践の伝統的潮流であるタントラが、母なる女神のイメージを重視していることが影響していると思います。

ところで、ヒンドゥ教の大きなアイディアの１つが、神を悟ることと神を愛することは同義だということです。私たちは自分の配偶者、子供、仕事、神etc.と様々なものを愛していますが、それぞれに対する愛の比重は異なり、どれも100％集中して愛してはいません。しかし神は嫉妬深く、100％の愛で愛さなければあらわれることはありません。そこでヒンドゥ教は、神を悟るために、神と自分の関係を人間関係に重ね合わせる（superimposition）ことで神を愛する霊的実践法を発展させてきました（暗闇の縄をヘビと見るのがsuperimpositionの代表例です）。これはヒンドゥ教の大きな特徴です

・神＝私の子供（例：クリシュナとヤショーダ）

・神＝親友（例：クリシュナは皆にとっての親友）

・神＝主人、私＝召使い（例：ラーマとハヌマーン）

・神＝霊的な恋人。（例：クリシュナとラーダー）

ではなぜ、中でも特に「マー、マー」と言うのでしょうか？　それは私たちのもっとも親しい人間関係の相手がお母さんだからです。私たちは皆、母親の中から生まれてきて、ミルクをもらって養ってもらい、病気になったときに面倒を見てもらいます。寝ずに面倒をみるのは大抵お父さんじゃなくてお母さんでしょう？（笑い）　母と子はそのように密着した関係を持ち、それは成長しても、結婚のあとも続きます。お母さんほど親しい関係はイメージできないのではありませんか？　その経験を神に重ね合わせて、信者は神との愛の関係をつくるのです。

もちろん生物上の自分のお母さんとは違います、母なる神はこの宇宙を創ったのですから。しかし自分のお母さんをマルティプライ（掛ける、増やす、増殖させる）して、自分のお母さんより大きい、もっと大きい、もっともっと大きい…とイメージすることはできます。ラーム・プラサードやシュリー・ラーマクリシュナは、神に母を重ね合わせて「マー、マー」と呼びかけました。

この実践のポイントは、どうしたらもっと深く神を愛せるか、ということです。しかしこれが一番難しいことです、なぜなら見たことも会ったこともない存在をどのように愛すればよいのですか？　そこで、自分に経験のある親しい人間関係の相手に神を重ね合わせて神を愛すことを有効な手段としたのです。すると神への愛が深まるからです。

**アッディヤー・シャクティ**

母なる神は「シャクティ」という言葉でも表現されます。シャクティとは「エネルギー、力」（power）という意味ですが、そもそもどうして「母なる神」が「力」なのでしょうか？

サンスクリット語のシャクティ（Shakti）は、アッディヤー・シャクティ（Adya Shakti）［＊Adi Shaktiとも］が本来の言葉です。アッディヤーとは「最初の」「原始の」「源の」という意味で、アッディヤー・シャクティを英語でPrimal Energy又はPrimordial Energy、日本語で「根本エネルギー」と言います。

エネルギーというと、様々なエネルギーがありますね──たとえば働きのエネルギー、話のエネルギー、心のエネルギー。私たちは身体はぐったりして休みたくても、心のエネルギーを使って仕事に出かけます。他に知性のエネルギー、スピリチュアル（霊的）・エネルギー。このように様々なレベルのエネルギーがあります。またある人のエネルギーと別の人のエネルギー、トラのエネルギー、ゾウのエネルギーなど、エネルギーにはレベルだけでなく種類も様々です──それらを合わせると源に行きます。それがプライマル・エネルギー、エネルギーの源です。すべてのエネルギーはその源から出ています。それがアッディヤー・シャクティです。宇宙を創造・維持・破壊する「源」の母はアッディヤー・シャクティ（根本エネルギー）です。それをシャクティと言う場合もあり、日本語訳もそれに合わせて時にはシャクティ、時には根本エネルギーとなっています。

ラーム・プラサードは、シャクティに「マー」と呼びかけて「源」のことを思うのです。源とはシャクティであり、母なる神であり、マザー・カーリーです。そして母なる神、マザー・カーリー、アッディヤー・シャクティ（根本エネルギー）と、ブラフマンは一緒です。

**📖『福音』４０頁上段　５行目**

*ブラフマンとシャクティとは、火とその燃える力のように、同一の存在です。われわれが火について語るときには、自動的にその燃える力をも意味しています。また、火の燃える力は、同時に火そのものを意味しています。もしあなたがいっぽうを認めるなら、必ず他のほうをも認めなければなりません。*

**（解説）**

ここでシュリー・ラーマクリシュナは、母なる神（シャクティ）とブラフマンはなぜ一緒と言えるのか、について、火の例を使って説明しています。「火」はブラフマン、「火の燃える力」はシャクティだと言っていますね。

「火」と「火の燃える力」を分けてイメージすることはできますか？　できません。火をイメージをしようとすると、火の燃える力のイメージも自然に一緒に付いてきます。そのことを考えると、火とその燃える力は別々のものではなく、同じものであり、同じものの２つの姿だと言えます。

同様に、ブラフマンとシャクティも同じものの２つの姿です。ある人が寝ています、そのあと起きて仕事をします。同じ人が、寝ているときには動いていない［＊＝無活動のブラフマンのイメージ］が、起きたらたくさんの仕事をするのです［＊＝創造・維持・破壊する母なる神のイメージ］。寝ている人も、仕事をする人も、同じ人です。このことをシュリー・ラーマクリシュナは、「もし火があると考えると、火の燃える力もあると信じなければならない」と説明しました。

**📖『福音』４０頁上段　１０行目**

*ブラフマンのみが、母と呼びかけられるのです。これは、母というものが深い愛の対象であるからです。人はただ愛によって、神を悟ることができるのです。法悦、帰依、愛、および信仰──これらは手段です。*

**（解説）**

「*法悦、帰依、愛、および信仰*」はベンガル語で「バーヴァ、バクティ、バロワサ、ヴィシュワーシュ」です。これらはecstatic love（神への深い愛）［＊前回、前々回とecstatic loveの具体例について話があった］のために必要です。

**シュリー・ラーマクリシュナの重要な教え**

『福音』６５７頁上段の後ろから２行目からを見てください。そこに今までの説明と同じ内容の説明が載っています。「ブラフマンとカーリーは一緒」というアイディアは『福音』の中に何回も出てきますが、たとえばその場所です。

ヴィジョイは「*ブラフマンが私たちの母であられるなら、それは何かの形をお持ちなのでしょうか*」と質問しました。そのあとにシュリー・ラーマクリシュナは色々説明していますが、そこにある大事なポイント、それを今話したいと思います。

神については混乱だけでなく、ときどき喧嘩のような議論もあります。なぜならある信者（またはグループや宗派）はシュッダ・ブラフマンだけが正しいと言い、別の信者は、神は形はないが性質があると主張するからです。そこには大きな意見の違いがあります。たとえば、キリスト教、イスラーム教は神の形があるとは信じていませんが、性質がないということも信じていません。彼らの神のアイディアは、形はないが性質は絶対にある、です。だから「神は慈悲深く、神は時々罰する」のです。しかしそれだけを信じると、ヒンドゥ教のシュッダ・ブラフマンのアイディアに反対することになります。インドでも、ブラフモー・サマージというグループはキリスト教と大体同じで、シュッダ・ブラフマンのアイディアに反対していました。

ヒンドゥ教の中でも議論があります。たとえばシュリー・ラーマクリシュナのヴェーダーンタの師であるトーター・プリは、絶対にマザー・カーリーの寺院には入りませんでした。ヴェーダ―ンティストである彼の考えでは、神の像を信じるということは無知を持っている証明だからです。ヴェーダ―ンティストのレベルは神像を礼拝するレベルより高いという態度だったのです。

トーター・プリは最終的にはマザー・カーリーの寺院に入りましたが、それは別の物語、別の出来事で、最初は絶対に入りませんでした。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダもそうでした。ナレン（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）も最初はマザー・カーリーの寺院に入りませんでした。それだけでなく、ラーカール（ブラフマーナンダジー）を批判しました、あなたはブラフモー・サマージのメンバーで、神像は信じないという誓いをたてたのに、なぜマザー・カーリーの寺院に入って神像を礼拝するのですか？　と。シュリー・ラーマクリシュナは言いました、「ナレン、ラーカールにそのように言わないほうがいい。彼は今は、前と違う考えになりました。今は神様の像も信じています。だからそのように言わないほうがいい」［＊👉『ラーマクリシュナの生涯　下巻』３８７頁（２００７年版）］

このように、様々な議論があります。

**📖『福音』６５７頁下段　後ろから１０行目**

*信仰を持ちなさい。そうすればいっさいが成就する。それから、つぎのこともよくおぼえておいで。もし神は無形であると信じているなら、確信をもってその信仰を貫きなさい。だが、独断的であってはいけない。神については決して、はこれだ、あれではない、などと強硬に言いはってはいけない。……たった１オンスぐらいの知性でどうして神の真の性質を知ることなどできるだろう。１シェール入りの瓶に４シェールのミルクを入れることができるかね。*

**（解説）**

それにたいするシュリー・ラーマクリシュナの態度が、とても大事な助言です。

それは、「あなたは自分が信じたい神の姿を信じてください。もし形も性質もない神を信じたければそれを信じ、その神を悟る実践をしてください。もし形はないが性質がある神を信じたければそれを信じ、その神を悟る実践をしてください。ですが、①喧嘩しないでください。②自分が信じる神のイメージだけが正しいとは絶対に言わないでください」

これが、『ラーマクリシュナの福音』の大きなメッセージ、シュリー・ラーマクリシュナの教えの大きな特徴です。神についての考えが異なる宗教と宗教、信者と信者は、いつも闘っているでしょう？　しかし闘っているあなたは、神をどれくらい理解していますか？　あなたの頭の力はそんなに大きいのですか？　それは有限な知力なのではありませんか？　あなたの有限の力で、無限である神を理解することなどできますか？

シュリー・ラーマクリシュナはミルクの例を使いました。たとえば、200グラムの容量のコップに、1キロの牛乳を入れれば溢れます。私たちの頭の力はそのコップです。ほんの少しの力しかないのに、エゴやうぬぼれによって、1キロも入ると思い込んでいるのです。しかし有限な私たちに神の本性を知ることは不可能です。学者の中にはすべてを知っていると勘違いし、エゴから本を作る人もいますが、しかし神について、私のイメージ「だけ」が正しいとは絶対に言わないでください。でも、もしあなたに自分独自の神への信仰があるなら、あなたはその道を進んでください。問題はありません。

**「私だけ正しい」という無知**

問題は、「私だけ正しい」、「私のイメージだけ正しい」ということです。宗教と宗教、宗派と宗派の問題はそれです。仏教でも各宗派で思想的な対立があります。テーラーワーダー仏教や大乗仏教（マハーヤーナ）だけでなく、マハーヤーナの中にもグループがあって批判し合っています。キリスト教も、ヒンドゥ教も同じです。

シュリー・ラーマクリシュナの助言はとても重要です──自分の信仰に従ってください、ですが、最終的に同じ目的に到達するのに、どうして「自分の道は正しいが、あなたの道は正しくない」と批判したり喧嘩したりするのですか？　東京に行きたいなら、逗子からも行けます、千葉からも大阪からもそれぞれの道を通って行けます。しかし、東京に行きたいなら逗子を通ってから行かないといけない、と主張して、大阪から逗子をわざわざ経由して東京に行かなくてはならない、というのはおかしく（ファニー）ありませんか？

　All roads lead to Roma.（すべての道はローマに通ず）──私たちのローマは「神」です。ヒンドゥ教の考えでは改宗はいりません。自分の考えに従ってください。なぜならすべての道は神に通じていますから。

**📖『福音』４０頁上段　１３行目**

*一つの歌を聞いてください。*

*瞑想に応じて、人の愛の感情は深い。*

*愛の深さに応じて、彼の得るところは決まる。*

*そして信仰はすべてのものの根。*

*もしカーリーののもとなる甘露の湖に、*

*私の心が浸ったままでいるなら、*

*礼拝や供物や犠牲供養はあってもなくてもよい。*

**（解説）**

**歌詞の解説（１）──***瞑想に応じて、人の愛の感情は深い。愛の深さに応じて、彼の得るところは決まる。*

瞑想とは集中して考えることです。そして集中して考えるということは、集中の対象について、長く深く考えるということです。するとその対象に愛着が生まれます。

ですが考えを集中させた結果は、考えの対象が何であるかによって異なります。犯罪者も泥棒もあることについて考え、そしてその結果が刑務所です。世俗的な人の考えの場合は、お金や欲望の満足、名声欲、家族親戚、自分の身体など、物質について考え、最終的な結果はすべて苦しみ、悲しみ、無知です。しかし信者が深く神について考えれば、最終的な結果は自由、至福、平安です。このように、考えの対象によって受け取る結果は異なってきます。重要なポイントは、何を考えるかということです。

何を考えるかは自分の選択です。苦しみの状態に甘んずる人は、歳をとったとき、心の中身のほとんどが後悔と失望です。しかし聖者は違います。歳をとるに従い肉体のエネルギーは普通の人と同様徐々に減りますが、心は明るいです。それは比べてみればわかります。世俗的な人生を生きてきた人の最終的な顔は暗く鈍いみたいです。しかし聖者の顔は明るく輝いています、なぜなら心が明るいですから。

ではそうなるために何が大事ですか？　信仰が大事です。神をいつも深く考える程の、深い信仰です。歌詞にありますね、「*信仰はすべてのものの根*」と。

**歌詞の解説（２）**──*そして信仰はすべてのものの根。*

「すべてのものの根」になる信仰とは、どのような信仰だと思いますか？

（参加者）自分が正しいと思うもの（を信じる）、とか…。

（参加者）自分を信じないといけないけれども、神を信じる。

説明しますね。

１つは、神、アートマン、ブラフマンを信じることです。神を私は見てはいないが、聖典が言っているから、聖者たちが見たと言っているから、神の化身であるラーマやクリシュナやラーマクリシュナやとムハンマドが言っているから、またそれだけでなく、たくさんの信者が神を信じて平安を得ているから、つまりそれらの証明があるから、私は神、アートマン、ブラフマンを信じます。悟ってはいないが識別して信じています。

次は、神について深く考えれば平安と至福を得ると信じている、これも信仰です。

もう1つは、皆が神を信じて幸せになっているので私も神を信じて幸せを得ます、という信仰です。

また、神の恩寵で、サムスカーラ──前世（複数）から蓄えられている傾向──を取り除けるという信仰です。

サムスカーラを取り除いて自分の傾向（性格）を変えるのは本当に大変です。たとえば嘘はつかない、言葉で他人を傷つけない、他人の過ちを見ないなどの実践を１つだけでもやってみたら、それがいかに大変かすぐにわかります。私はどれほど他人を批判しているか、口で言わなくても心でどれほど責めているか、会話のレベルでだけでなく、心のレベルで変えるのが本当に難しいことです。

性格の変化は難しい、ですが心をきれいにしないと（＝チッタ・シュッディ）、神がいてもあらわれてくれません。太陽はあるが、それを雲が隠しているので見えないのと一緒です。私たちの汚いものは、心の中の雲みたいです。もし自分の性格を直したいなら、まず①一生懸命実践します。しかしどれくらい実践したらそれが可能なのかはわからないので、②神を信仰して神に結果はお任せします。すると、神様の恩寵で、千年開けていなかった部屋の暗さが、一瞬で明るくなる可能性があります。神の恩寵で、ずっとたまっていたサムスカーラが消える可能性があります。この話は『福音』の中にありますね。それも信仰です。

神の恩寵がテーマの信仰歌はいろいろあります。また数多の罪を犯した罪びとが、マザー・カーリーの名前を唱えたらすべての罪が消えた、という話もあります。burning faith、それは燃えるような信仰の例です。

そしてこの種類の信仰が大事なのです。どんなにたくさん神の名を唱えても、「私は罪びと」という考えがあったら、それは矛盾ではないですか？　神の信仰があれば、「私はたくさん罪を犯したけれど、神の御名をたくさん唱えて神について深く考えているから、すべての罪は消える」、とどうして考えないのですか？　どうしてあなた、自分は罪びと、自分は罪びととまだ言っていますか？　なぜなら信仰がないからです。あなた信じてない、神様の名前で私ほんとに清らかになると、信じてないです、その信仰がないです。信仰があったら！、絶対その考えが出ないです。そうシュリー・ラーマクリシュナは言っています。

シュリー・ラーマクリシュナは燃えるような信仰の、現在における１つの実例です。私たちは罪を犯しますがシュリー・ラーマクリシュナの名前を唱えたら、罪は全部消えて、清らかになります──それが信仰です。それがなかったら、どんなに神の名前を唱えても、どんなに神について考えても、普通の世俗的な人の状態と、あまり何も変わりません。

1つ物語があります──ある罪びとが、ある聖者の家に行きました。しかし聖者は留守で、息子がいました。息子もレベルの高い方でした。そこで聖者を待つだけの時間の余裕がなかった罪びとは、「罪をどのように取り除けばよいですか？」と息子にたずねました。息子は、「3回ラーマの御名を唱えてください。それですべての罪が取り除かれます」と答えました。罪びとは家に戻りました。そのあと聖者が帰ってきました。息子は出来事を報告しました。そして聖者は息子にこう言いました、「なぜ3回と言ったのだ？　1回だけで十分ではないか」──燃えるような信仰があれば、1回唱えるだけで十分です。

**歌詞の解説（３）――***もし母カーリーの御足のもとなる甘露の湖に、*

「甘露の湖」は（英語でsimile）です。直喩の例を挙げれば、神の足については、よく蓮の花に例えられます。チャラナカマラ、チャラナパドマと言いますが、パドマもカマラも蓮の花です。目についての直喩は蓮の花びらで、たとえばラーマ神様の目はカマラローチャン、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの大きな目もカマラローチャンです。

同じように、この詩の「*カーリーの御足*」、ベンガル語で「カリーパダ」（パダは足という意味です）の直喩は「シュダーラダ」（甘露の湖）です。

この歌の場合は蓮の花ではなく、甘露の湖というところがおもしろいです。シュダーが甘露（アムリタ）。普通の湖でなく、（強調して）甘露の湖です。甘露の特徴は何ですか？　①素晴らしい味（砂糖もキャンディーも甘いです。しかし甘いだけでなく、私たちの食べ物飲み物の経験にないほど素晴らしい味です）、②それを飲むと不死になることです。その甘露がなみなみとたたえられている湖のシンボルが、マザー・カーリーの足です。

そしてパダはマザー・カーリーのシンボルですから（＝マザー・カーリー全身全体が甘露の湖であるということです。マザー・カーリーの手や頭は甘露の湖ではないということではありませんので誤解しないでください）、実際は「マザー・カーリーは甘露の湖」と歌っていることになります。

それに、湖に入ると、身体が涼しくなって身体も心も気持ちいいですね。その気持ちのよさもイメージしてください。ここで言っていることは、マザー・カーリーの甘露の湖に入ると、特別な至福を得、それだけでなく、不死になります、ということです。

ところで、元々の歌詞のベンガル語のこの部分は「カリーパダ　シュダーラダ」です。ちょっとリズムがあるでしょう？　翻訳すると、英語では「If in the Necter Lake of Mother Kali‘ｓ feet」。もちろん訳は正しいですが「カリーパダ　シュダーラダ」というリズムは出ないです。オリジナルと翻訳はそれが違います。

**歌詞の解説（４）――***もし母カーリーの御足のもとなる甘露の湖に、私の心が浸ったままでいるなら、礼拝や供物や犠牲供養はあってもなくてもよい。*

「カリーパダ　シュダーラダ　チッタ　ジョディ　ドゥベラーネ」、

もし私の「チッタ」（心）が甘露の湖に入ると、

「タベ　プジャ　ホン　ヤガ　ヨッガ　キチュイキチュ」、

礼拝や、供物や、犠牲供養はあってもなくてもよくなります。

これと同じ内容で、とても有名な賛歌があります、「ガヤーガンガー　プラヴァーシャディ　カーシーカーンチ　ケバチャイ」［＊この講義の最後にこの歌が奉献されています。講義のビデオの１：５４：５０秒くらい］──いちどマザー・カーリーのことを深く考えたら、ガヤー、ガンガー、カーシー（ベナレス）などの聖地に行かなくてもよい。別の実践は不要である。

シュリー・ラーマクリシュナの出来事を１つ紹介します。ハズラさんはいつもシュリー・ラーマクリシュナの部屋のベランダで数珠を繰ってジャパをしていました。どれくらい信仰をもって集中していたかはまた別のことですが、皆にその姿を見せたくてベランダで数珠を繰っていました。あるときシュリー・ラーマクリシュナが自分の部屋から出てベランダに行って、「ハズラ、数珠をちょっと貸してください。私はジャパがしたくなりました」。シュリー・ラーマクリシュナは、マザー・カーリーを悟ったあと全くジャパをしていませんでしたので、「私はずっとジャパをしていなかったから、今数珠を繰ってジャパをしましょう」と言ったのです。ですが1回2回3回ジャパして、すぐサマーディに入ってしまいました。わかりますか？　もうジャパはいらなかったのです。ジャパの目的はサマーディではないですか？　シュリー・ラーマクリシュナにはもう不要だったのです。これが実際の例です。

以上

・賛歌奉献「ガヤーガンガー　プラヴァーシャディ　カーシーカーンチ　ケバチャイ」

（20200913『福音』勉強会　以上）